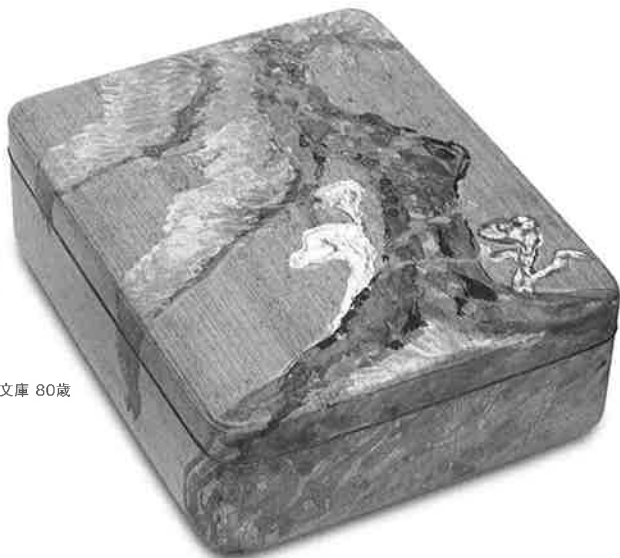




35. 松竹梅雲芝絵料紙文庫 80歳
中島菊齋作



鉄斎の器玩 — 匠との共演 —

平成21年1月8日(木)～3月8日(日)

前期 1月8日(木)～2月8日(日)

後期 2月11日(水)～3月8日(日)

10時～16時 月曜日休館 但し1月12日は開館 翌日休館



44. 松芝不老絵文台 81歳
中島菊齋作

器玩とは身近に置いて賞玩し日々愛でる器や工芸品を指す言葉である。

一般に「鉄斎の器玩」と我々が呼ぶものには鉄斎が絵付けをしたり、或いは文字や詩文を書いた煎茶碗、抹茶碗、香合、香炉、花器、鉢、茶壺、器局、炉屏などがあり、煎茶の道具類が多数を占めている。青年時代の鉄斎は歌人大田垣蓮月尼（1791～1875）のもとで作陶の手伝いをし、蓮月を通じて多くの志士や文人と知り合い、彼らが嗜んでいた煎茶の世界に馴染んでいった。そして20歳代の鉄斎は中国唐時代の『茶経』三巻を著した陸羽や「茶歌」で知られる盧仝、日本の煎茶の祖売茶翁高遊外を詠んだ詩を多く遣し⁽¹⁾、32歳の時には『宜興瓷壺譜』『文房清約図』『桑苧遺韻』の三部からなる『鍔莊茶譜』を上梓するまでになった。煎茶への傾倒と理解はさらに深まり、生涯を通じて煎茶に因む様々な書画を生み出した。それは器玩についても同様である。しかし器玩の全貌を見るとそれは単に煎茶の世界に留まらず多様な器物に鉄斎ならではの絵を施し文字や詩文を書きつけて、変化に富んでいることが判る。そのことは鉄斎と合作を遣した作者の芸術性と技に依るところが大きいといえるのではなかろうか。

では鉄斎と合作をした作者の名を挙げてみる。陶工では初代浅見五郎介、三代・四代・五代清水六兵衛、四代・六代高橋道八、初代・二代三浦竹泉、十七代雲林院宝山、初代諏訪蘇山、金工では二代・三代秦蔵六、指物師では三代一瀬小兵衛、中島菊斎、三代三好木屑、釜師三代高木治良兵衛などが見られる。この他にも千家十職の釜師大西清右衛門、金物師十代中川浄益、塗師中村宗哲との合作や、指物師十一代駒沢利斎や竹細工・柄杓師十一代黒田正玄との親交も知られていて、彼らは鉄斎の生きた幕末から明治・大正時代の京都・大阪で活躍していた名工・匠であった。こうした名工との合作が生まれるに至った経緯については遺された作品や書簡などから次第に明らかになってきた。しかし残念ながら未だ不明な点も多い。匠の手によって作り出された器物や木工品、それを前にした鉄斎の感性がまるで一つの舞台でお互いを高め合うかのようにして生まれた器玩は正に匠との共演というに相応しい世界といえる。現在確認されている数多の名工の中で多くの合作が見られるのが中島菊斎である。

今回は優れた合作が遺されながらも永らくその詳細が不明であった中島菊斎のご遺族から、初めて様々な情報のご提供をいただいた。新たにコレクションに加わった菊斎宛の書簡や資料に基づいて、鉄斎の深い信頼の下で多くの合作を生んだ指物師中島菊斎を採り上げることにする。

中島菊斎（1874～1935 明治7年11月～昭和10年7月9日） 名を菊之助といい、菊斎は号で屋号は秋古堂とあった。今日では鉄斎との合作により名指物師として知られている。両親は丹波の出身で、二男二女の末子に生まれたのが兄の死により、菊之助が家業を継いだ。妻千賀（1878～1973）との間に三男五女をもうけた。しかし実子によって家業が受け継がれることはなかったようである。

秋古堂の名は明治45年発行の『京都実業界』（博信社）の広告欄に「指物師秋古堂中島菊之助 間之町御池北入」とあり、大正12年発行の『都市と芸術』（都市と芸術社）には「美術京指物中島秋古堂号菊斎 京都市堺町押小路上」、昭和3年1月の同誌にも前述の住所が掲載されているが、同年4月には京都岡崎町となっていることから、この間に居を移したことが判る。

昭和4、5年頃に娘の嫁ぎ先に近い大阪市萩之茶屋に移転し、指物の仕事を続けていたが、昭和10年その地で没した。菊斎の履歴などが伝わらなかったのも京都を離れ大阪が終焉の地となったことによると思われる。戒名は菊斎浄香信士。墓は京都市上京区心山光清寺（臨済宗建仁寺派）の墓域にあり、明治33年に建てられていることから菊斎が両親や兄のために建てたのであろう。家紋の丸に違い矢の下に「中嶋氏」とのみ彫られている。

菊斎の指物師としての仕事は上記の『都市と芸術』で美術京指物として紹介しているように、京指物の伝統的な繊細で洗練された技術であったことは遺された鉄斎との多くの合作から知ることができる。また大正天皇大典記念京都博覧会（1915）では桐文台が金賞を受賞し⁽²⁾、昭和天皇大札記念京都博覧会（1929）では卓が銀牌を受賞し、桐書棚も出品されている⁽³⁾ことから当時の評価も高かったことが判る。



67 魁星関図絵具皿



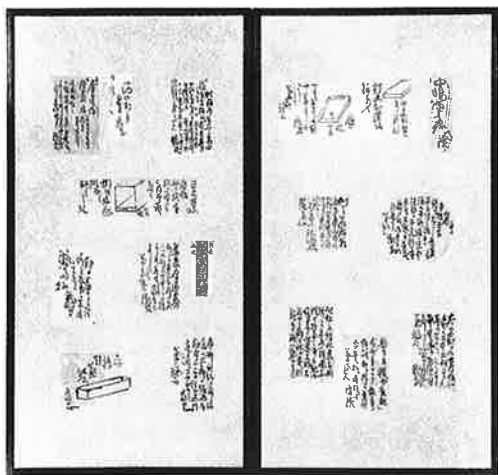
鉄斎と菊斎 二人の出会いはいつ頃のことであつたらうか。鉄斎の室町一条の自宅と菊斎の堺町押小路上の住まいとは近く、歩いて十数分の距離にあり、当然鉄斎に菊斎の評判は伝わっていたであろう。息謙蔵（1873～1918）と一歳年下の青年指物師菊斎の仕事を知った鉄斎は、その真面目な人柄と確かな腕を次第に信頼するようになったと思われる。現在両者の合作で年令の判っている最も早いものは鉄斎77歳の「石図方盆」（No91のうち）である。はじめは鉄斎が日々使用する机や印の箱、書物を収める箱、或いは軸の箱などを注文していたのであろう。信頼の深まりと共に合作が生まれる素地ができあがって行ったと思われる。遺されている鉄斎遺愛の印矩に「菊斎造」と彫られたものがあり、鉄斎が愛用していた米寿硯の硯台の裏には「応鉄斎先生命 秋古堂菊斎造」と刻まれ、また鉄斎と初代諏訪蘇山との合作の絵具皿を納める木器（No67、68）や大きな自刻の磁印「括囊無咎（囊を括る、咎め無し）」を納める箱も依頼した。

晩年の鉄斎、特に謙蔵亡き後の鉄斎には謙蔵の友人等が親しく出入りし鉄斎の学問の友となっていたが、彼らとはまた別に親しく往来して富岡家と付き合い細々と鉄斎の用を手伝っていた人達がいた。それが京都虎屋主人黒川魁亭であり、古美術商高田採古堂新助であり、中島菊斎であった。菊斎の妻千賀は謙蔵の妻とし子と同年ということもあって繁く出入りし、鉄斎の妻春子と親しくしていた。千賀は出来上がった品を届けたり新たな注文を受けたりもしていたという。

鉄斎は大正10年（1921）、高野山靈宝館に「放光閣」の大額を寄贈したが、この額縁は菊斎が制作した。奉納前の記念写真には鉄斎夫婦、鉄斎に代わって靈宝館へ大額を届けた前田正名、高田採古堂新助、木額を制作した橋本玄々堂と共に菊斎も加わっている。同13年6月15日万福寺で開かれた売茶翁高遊外記念茶会の記念写真には黒川魁亭、高田新助等と共に菊斎の姿があり、また同年9月1日に京都祇園社で写された写真にも魁亭、新助と共に菊斎の姿を見ることが出来る。

菊斎宛書簡 現在確認できる書簡は主に鉄斎80歳代のものと推測される。このうち27通は菊斎が鉄斎との思い出として自ら二曲屏風（No115）に仕立て身近に置いていたと思われるものである。書簡には簡単な図入りのものもあり鉄斎の求めを阿吽の呼吸で心得た菊斎であったことが判る。また注文依頼や受け取りの礼状の他に酒や茶などの贈り状、茶会の誘い状、菊斎の仕事に役立つような木材の贈り状などがあり、菊斎への信頼や親しみの深さを感じられる。書簡の一つに鉄斎と親交のあった前田正名から贈られた北海道後方羊蹄山の陰陽木を「貴家木匠なれば進上」と書いたものがある。この材を贈られた菊斎は印頼に仕立て鉄斎に贈ったのではないだろうか。大正4年（1915）、80歳の鉄斎は大正天皇即位に際し養老木杯を賜ったことを記念して自ら「天賜寿杯」印を刻したが、その印材は北海道羊蹄山の老樹であったという。また名酒金鶏正宗の贈り状には「愚老は飲まずに付き貴家へ進上。新年是にて御祝慶有り候」と書かれている。若くして7人の弟子をかかえ、無口で真面目な性格ながら酒を好み毎晩二合ほどの晩酌を欠かさず、岡崎に茶室を持ち、時々茶会を開き茶の湯も嗜み、休みには芝居や漫才を楽しんだという菊斎を好もしく思い、いつも気に懸けていた様子が見えてほほえましい。菊斎は鉄斎を親同様に慕い尊敬し、鉄斎の没後は自身で位牌を作り自宅で祀っていたという。

菊斎との共演 高田採古堂などの仲介があつたとはいえ気心が知れ信頼する名工菊斎の造った形あるもの、白木の桐材で造られた立体に向き合ったとき、鉄斎の創作意欲は触発され、独自の感性が存分に発揮された。大きな



高野山靈宝館「放光閣」額完成記念 於京都美術倶楽部 左より中島菊斎・前田正名夫人・鉄斎妻春子・鉄斎・前田正名・高田新助・橋本玄々堂

《菟道真景詩画器局》(No.20)、《松竹梅靈芝絵料紙文庫》(No.35)、《松芝不老絵文台》(No.44)、《四君子絵桐印筆筒》(No.81) や小さな《四君子絵桐茶壺》(No.34) にはこぼれんばかりに色彩豊かに画面が展開され、《仿銅器式桐香炉》(No.59、89) は本物の青銅器かと見まごうばかりに着色を施している。《亀絵桐雕盆》(No.80) は米寿の鉄斎が、返す波を表した盆の縁と盆の中に刻まれた波模様で長寿のシンボルである緑毛亀が長い藻を波に任せて悠々と泳ぐ姿を描くという、正に秀逸の合作となっている。《蘭絵手文庫》(No.36) は菊斎から贈られた和綴本を象った美しく繊細な手文庫で、鉄斎はそれに蘭を描き、「万宝全書」と題を書して大切にしていた。また売茶翁高遊外の煎茶具を模した器局 (No.86) や煎茶道具 (No.91のうち) には木村兼葭堂編『売茶翁茶器図』(1823年) に倣って文字や詩を書し、それらは先の彩色の作品とは違う端正な合作となった。

こうした両者の合作は鉄斎の手が加わることにより本来の目的を離れ、鑑賞の対象となったとはいえ菊斎もそれを望んでいたのではないだろうかと思わせるものとなっている。匠菊斎との共演は華やかな世界を生み出し、我々の器玩として日々目を楽しませてくれるのである。

今回は器玩の世界に相応しい鉄斎の絵や書の他、身辺に置いて清玩した硯や蓮月尼の作品なども併せて展示し、「鉄斎の器玩」の世界を楽しんでいただけるようにした。(奥田素子)

- [1] 鶴田武良編『鉄斎筆録集成 第一巻』(便利堂 1991)
- [2] 『大典記念京都博覧会報告』(京都市役所 1916)
- [3] 『大礼記念京都大博覧会誌』(京都市役所 1930)

《出品目録》

番号	名 称	制作年	年齢	寸 法	備 考	
1	寿字陶鼎	1867	慶応3	32	22.5×24.4×24.4	初代 浅見五郎介
2	人物絵染付火鉢	1867	慶応3	32	23.4×22.9×22.9	初代 浅見五郎介
3	歳寒二友図瓶懸火炉	1867	慶応3	32	32.0×23.0×23.0	初代 浅見五郎介
4	四君子図汎蓋 四客	1868	慶応4	33	3.5× 7.8× 7.8他	初代 浅見五郎介
5	白磁酒蓋 二客	1868	慶応4	33	(各) 3.3× 6.5× 6.5	初代 浅見五郎介
6	蔬菓図飯碗 五客	1871	明治4	36	(各) 6.3×10.6×10.6	
7	名花十友図染付吸物碗 十客			30代	(各) 7.8× 8.6× 8.6	初代 浅見五郎介
8	磁筆洗 銘松風水月	1882	明治15	47	8.5×16.0×14.8	三代 清水六兵衛
9	捏焼香炉			50代	7.5×12.5×12.5	鉄斎・春子合作
10	瓢德利 銘雖小	1900	明治33	65	15.0× 8.0× 8.0	
11	十友図菓子盆 十客			60代	(各) 1.3×13.7×13.7	
12	煎茶碗 五客			60代	(各) 3.8× 6.4× 6.4	鉄斎・春子合作
13	狸絵捏茶碗			60代	6.0×10.0×10.0	鉄斎・春子合作
14	仿漢鼎式東山窯香炉			60代	13.5×11.2× 8.0	四代 高橋道八
15	羅漢図磁鉢			60代	9.6×18.2×18.2	四代 清水六兵衛
16	詩書花尊	1912	大正1	77	42.0×19.0×19.0	四代 清水六兵衛
17	喜寿書沙鍋	1912	大正1	77	7.1×35.9×35.9	深草平右衛門
18	京八景図茶盒 一双	1914	大正3	79	(各)11.3× 5.0× 5.0	三代 一瀬小兵衛
19	竹石絵染付水注	1914	大正3	79	17.1×19.8×11.9	四代 清水六兵衛
20	菟道真景詩画器局			70代	47.5×45.3×29.0	中島菊斎
21	菊絵茶碗			70代	5.5×13.7×13.7	四代 清水六兵衛
22	軸首 二組			70代	(各) 3.2× 3.0× 3.0	鉄斎手造
23	仁者寿字磁印			70代	4.7× 5.3× 5.3	鉄斎手造
24	人物絵染付急須			70代	7.6×10.5×11.8	四代 清水六兵衛
25	煎茶碗 五客			70代	(各) 4.7× 6.0× 6.0	鉄斎・春子合作
26	俵香合			70代	4.2× 5.8× 4.2	鉄斎手造
27	茶杓 銘野々宮			70代	長18.1	鉄斎手造
28	寿字オランダ写并鉢			70代	9.6×23.4×23.4	四代 清水六兵衛
29	富岳図楽茶碗			70代	7.5×11.0×11.0	鉄斎・春子合作
30	茅屋香炉			70代	7.3× 7.0× 5.5	鉄斎手造
31	竹製聯			70代	(各)95.2×12.9	
32	朱竹絵幡			70代	72.5×31.5	
33	蟹絵炉屏	1915	大正4	80	41.0×60.0×29.0	中島菊斎
34	四君子絵桐茶壺 一双	1915	大正4	80	(各)11.4× 7.8× 7.8	中島菊斎

35	松竹梅靈芝繪料紙文庫	1915	大正4	80	硯箱 5.4×22.7×25.9 文庫 13.7×34.0×41.5	中島菊齋
36	蘭繪手文庫	1915	大正4	80	9.0×19.5×26.2	中島菊齋
37	万歳書茶碗 十客	1915	大正4	80	(各) 4.7× 8.0× 8.0	初代 三浦竹泉
38	木製聯	1915	大正4	80	(各)85.5×18.0	
39	金剛杵墨			80代	7.1× 3.2	鈴木梅仙
40	茅屋香炉			80代	6.3× 9.0× 6.7	鉄齋手造
41	吉野山繪茶碗			80代	8.6×12.7×12.7	英昌堂泰山
42	円形茶壺 一双	1916	大正5	81	(各)10.0× 5.3× 5.3	陶:二代 三浦竹泉 錫:二代 秦蔵六
43	歳寒三友図炉屏	1916	大正5	81	31.5×72.2×72.2	
44	松芝不老繪文台	1916	大正5	81	10.3×57.5×35.8	中島菊齋
45	藻魚図溜金滓盃	1916	大正5	81	5.3×13.7×13.7	中島菊齋
46	茶心壺	1917	大正6	82	8.2× 6.3× 6.3	十七代 雲林院宝山
47	通天煮茶詩画磁鉢	1917	大正6	82	8.0× 8.5× 8.5	二代 三浦竹泉
48	梅花式磁鉢	1917	大正6	82	5.5×10.2×10.2	鉄齋・春子合作
49	魚形巾台	1918	大正7	83	2.8×10.9× 5.6	鉄齋手造
50	長瓢杓	1918	大正7	83	長82.0	中島菊齋
51	茅屋香炉	1918	大正7	83	7.8×11.0× 6.5	鉄齋・春子合作
52	蝶繪溜箔薄桐香合	1918	大正7	83	2.1× 8.0× 8.0	象彦製
53	菊香合	1919	大正8	84	3.5× 5.5× 5.5	鉄齋・春子合作
54	蝸牛廬図急須	1919	大正8	84	7.0×10.2× 6.5	二代 三浦竹泉
55	古桐炉縁	1919	大正8	84	6.6×42.6×42.6	杉山芦流
56	竹丸雕茶碗筒	1919	大正8	84	11.2× 9.8× 8.5	
57	竹挿花器 銘虚心抱節	1919	大正8	84	39.7×16.2×16.8	
58	田家早梅図茶碗	1919	大正8	84	6.2×11.8×11.8	鉄齋・春子合作
59	仿銅器式桐香炉	1919	大正8	84	7.2×10.2× 7.8	木 器:中島菊齋 銀火舎:三代 秦蔵六
60	仿壳茶式煎茶碗 六客 木米隠栖図竹茶碗筒	1919	大正8	84	(各) 3.7× 6.2× 6.2 11.0× 7.7× 7.7	二代 三浦竹泉
61	詩書手彫花生	1920	大正9	85	40.3×18.5×18.5	四代 清水六兵衛
62	双寿千年絵染付煎茶碗 五客	1920	大正9	85	(各) 4.5× 6.7	五代 清水六兵衛
63	狸香合	1920	大正9	85	6.2× 6.5× 5.8	鉄齋手造
64	蓮月幽居図四方釜 蓮月尼歌賛	1920	大正9	85	28.4×22.7×20.3	三代 高木治良兵衛
65	磁印香合	1920	大正9	85	4.5× 5.3× 5.3	鉄齋手造
66	富士山形香炉	1920	大正9	85頃	18.5×35.0×24.0	初代 諏訪蘇山
67	魁星閣図繪具皿 十二枚重	1921	大正10	86	23.0×15.5×15.5	瓷器:初代 諏訪蘇山 木器:中島菊齋
68	魁星図繪具皿 十一枚重	1921	大正10	86	19.0×15.5×15.5	瓷器:初代 諏訪蘇山 木器:中島菊齋
69	高遊外詩画染付菓子鉢	1921	大正10	86	8.8×18.4×18.4	初代 諏訪蘇山
70	清風書壳茶式茶旗	1921	大正10	86	53.0×44.5	
71	炭斗	1921	大正10	86	19.0×21.5×20.0	
72	蓮繪茶碗	1921	大正10	86	8.7×12.1	英昌堂泰山
73	瓢繪炉屏	1921	大正10	86	29.0×93.0×93.0	
74	方竹挿花器	1921	大正10	86	35.5×11.8× 9.5	三代 三好木屑
75	蘭菊図器局	1921	大正10	86	36.3×38.5×24.5	
76	扇式菓子器	1922	大正11	87	7.5×32.5×27.4	中島菊齋
77	挿花竹筒	1922	大正11	87	19.0×15.0×15.0	
78	白泥湯罐	1922	大正11	87	13.2×13.5×11.6	初代 諏訪蘇山
79	赤壁会所用煎茶器 一式	1922	大正11	87	水注 16.0×19.5×11.4 菓子鉢 9.0×16.7×16.7 茶心壺 11.5× 5.2× 5.2	六代 高橋道八 六代 高橋道八
80	亀繪桐雕盆	1923	大正12	88	27.5×47.0	中島菊齋
81	四君子繪桐印筆筒	1923	大正12	88	39.5×40.8×28.5	中島菊齋
82	青華香合	1923	大正12	88	3.2× 6.7× 6.7	二代 諏訪蘇山
83	松繪釜 銘松風	1923	大正12	88	20.6×23.4×23.4	三代 高木治良兵衛
84	鴨川曉望図煎茶碗 五客	1923	大正12	88	(各) 4.3× 7.4× 7.4	鉄齋・春子合作
85	清風書壳茶式大茶旗	1924	大正13	89	176.0×48.0	黒川魁亭
86	傳窠書壳茶式器局	1924	大正13	89	55.6×26.7×27.6	中島菊齋
87	槌	1924	大正13	89	6.6× 7.7×14.4	中島菊齋

88	匏菓子器	1924	大正13	89(90)	17.0×21.5×21.5	豊斎
89	仿銅器式桐香炉	1924	大正13	89(90)	24.0×25.0×20.0	中島菊齋
90	蘭絵香盆	1924	大正13	89(90)	47.5×36.0	中島菊齋
91	煎茶皆具のうち					

[絵画・書]

番号	名 称	制 作 年		年 齢	本 紙 寸 法	材 質・彩 色	形 状
92	煎茶図 蓮月尼歌賛	1866	慶応2	31	129.0× 28.7	紙本 墨画	掛 幅
93	愜趣帖・清娛帖	1867	慶応3	32	(各) 8.8× 13.4	紙本 淡彩	画 帖
94	間有趣帖	1868	慶応4	33	(各) 13.5× 19.8	紙本 淡彩	画 帖
95	花瓶図 蓮月尼歌賛	1869	明治2	34	135.5× 30.6	紙本 墨画	掛 幅
96	菟道製茶図・粟田陶窯図	1869	明治2	34	(各)130.0× 44.4	紙本 淡彩	掛 幅
97	春山游賞図			30代	122.0× 34.2	絹本 淡彩	掛 幅
98	陽羨清韻画冊			30代	(各) 21.0× 28.6	紙本 淡彩	画 帖
99	養竹山房図	1883	明治16	48	66.5× 33.1	紙本 淡彩	掛 幅
100	清居医俗図	1883	明治16	48	66.5× 33.1	紙本 淡彩	掛 幅
101	牡丹挿瓶図	1883	明治16	48	66.5× 33.1	紙本 淡彩	掛 幅
102	楽此幽居図	1883	明治16	48	66.5× 33.1	紙本 淡彩	掛 幅
103	煎茶聯			40代	(各)130.8× 16.3	紙本 淡彩	掛 幅
104	陸羽像			40代	125.5× 28.2	紙本 墨画	掛 幅
105	華甲図	1902	明治35	67	119.5× 27.6	紙本 墨画	掛 幅
106	陸羽像			60代	64.2× 20.9	紙本 墨画	掛 幅
107	梅溪清隱図	1910	明治43	75	139.3× 39.9	絹本 着色	掛 額
108	盧仝喫茶図	1919	大正8	84	42.0× 50.2	絹本 着色	額
109	東坡煎茶図	1921	大正10	86	133.0× 32.6	紙本 淡彩	掛 幅
110	頼氏山紫水明荘図	1921	大正10	86	28.8× 41.7	紙本 墨画	掛 幅
111	歳朝図	1922	大正11	87	132.6× 32.4	紙本 淡彩	掛 幅
112	対山医俗図	1924	大正13	89	169.8× 41.2	紙本 墨画	掛 幅
113	陸羽茶癖図	1924	大正13	89	133.9× 33.5	紙本 淡彩	掛 幅
114	君子清遊図	1924	大正13	89(90)	144.5× 40.5	紙本 淡彩	掛 幅
115	中島菊齋宛書簡 27通			80代		紙本 墨書	貼交屏風
116	諏訪蘇山宛			80代	24.0× 46.0	紙本 墨書	掛 幅

出品作品は期間中下記の通り前後期に分けて展示します。
但し一部作品は重複することがあります。

前 期 1月8日(木)～2月8日(日) 後 期 2月11日(水)～3月8日(日)

下記の日程で学芸員による展示説明会を行います。
1月17日・31日・2月14日・28日 各土曜日の午後1時30分より

今回の展覧会に際して下記の方々にご協力を賜りました。記して感謝いたします。(敬称略)

光清寺 伊藤恵美 勝俊一 勝正義 徳永勲保

次回展覧会 「鉄斎 ―先賢を画く―」 平成21年3月11日(水)～5月6日(水)

清荒神清澄寺 鉄斎美術館 〒665-0837 宝塚市米谷字清シ一番地 清荒神清澄寺山内
(0797)84-9600
平成20年12月22日 印施